

令和5年度第3回青森県子ども未来県民会議

(司会)

お時間になりましたので、ただ今より「令和5年度第3回青森県子ども未来県民会議」を開催いたします。

私は、司会進行を務めます、株式会社I・M・Sの三上と申します。本日もどうぞよろしくをお願いいたします。

はじめに、本日の会議の予定を御説明いたします。次第を御覧ください。

知事の挨拶に続きまして、今年1月に県内3か所で開催したワークショップの結果についての御報告し、次いで、県から令和6年度予算案を説明した後、知事とメンバーの皆様との意見交換となります。

また、本日は、メンバーのうち、亀山さん、越田さん、田中さんの3名が欠席となっております。

それでは、知事より開会の御挨拶をお願いいたします。

(宮下知事)

皆さん、こんにちは。今日もよろしくをお願いいたします。

私、皆さんにひとつ凄く感謝をしまして、この会議を始めて、皆さんから子育ての話を知ったり、自分自身でも考えるようになって、自分自身の親としての子どもへの接し方が、凄く変わったと思っています。というのは、実は受験生が1人いたんですけど、受験に連れて行ったりだとか、あるいは下宿を探したりだとか、一緒にやりました。

おそらく、この会議がなかったら、そんなことはしていなかったと思う。ただ母親任せで、行ってきたのを聞いて、お金がどうこうという相談だけ乗って、多分終わっていたと思うんですが、やっぱり自分も皆とお話をして、いろいろ考えて、自分も親としてやらなきゃいけないことってあるんじゃないかって思うようになって、知事ですから、仕事を休むことも大変だったんですけど、皆に迷惑をかけながら、という気持ちになるのもおかしいっていう話をここでもしていたと思うんだけど。

でも、そういう気持ちになり、実際、やってみて、凄く良かったです。たまたまなんですけど、車で娘が前に座っていて、私が後ろ、あまりそういうのはなかったんですけど、ちょっと遠出したんで後ろに座って、妻が運転していたんですけど、娘が助手席で爪切り始めたんです。パチパチ、パチパチ飛んでいたんです。母親から凄く注意されて、「あんた、それ、爪、飛ばさないで」という話を聞いていて、それ見てふと思ったのが、一番最初にその子を抱っこした時に、産まれてすぐですよ、分娩室の隣で抱っこした時に、いろんなことを聞くじゃないですか、赤ちゃんってこうだよ、そうだよって聞いていて、全部その通りだった

たんです。温かくて、産まれたてだから、本当にあかくて。でも、凄く予想外だったのが、爪がしっかり生えていたのね。ギュってやった時に、何か本当に爪だけ伸びていて、ギュってやられると、痛くはないけど、赤ちゃんだから。でも、爪が生えているんだっていうのを凄く覚えていたんですよ。

で、パチパチ、パチパチ、前で爪切っているのを見て、いや、本当、大きくなったなと思って。

でも、本当に大事なものは、やっぱりそういう瞬間って、これからもあるし、この会議でそういうことを考えなかったら、そういうチャンスもなかったなというのを考えると、本当に皆さんに感謝しかなくて。やっぱり、ここで議論していることとか、あるいは、この議論した結果とかっていうことも、凄く大事なんですが、今日も、そのプロセスも大事にしながら意見交換を進めていければなと思っていますので、是非、皆さん、よろしく願いいたします。

1つ、紹介があるんですけど、いいですか。

今、子育ての方ではなくて、教育の方で総合教育会議という会議があるんですが、教育施策の大綱というのを作るんです。そのキーワードを作りまして、やっぱりこれからは、「こどもまんなか青森」を目指して、これで教育も子育ても頑張っていこうというふうに考えました。そのロゴがこれなので、まず、この場で一番最初に皆さんに御紹介申し上げまして、私からのスタートの御挨拶とさせていただきます。

今日もよろしく願いいたします。

(司会)

ありがとうございます。

続きまして、ワークショップの実施報告と進んで参ります。

(事務局)

改めまして、皆さん、こんにちは。

株式会社I・M・Sの野宮です。

ワークショップ第2シリーズについて御報告申し上げます。

ワークショップの目的ですが、県民の意見を広く聴取し、その内容を青森県こども未来県民会議の検討資料とすることです。

内容は、子育てに対する体験や少子化に対する意見交換、参加対象は、県内にお住まいの18歳以上の方で募集いたしました。

開催内容は御覧のとおりです。

八戸15名、五所川原19名、三沢13名の合計47名に御参加いただきました。

各会場の参加者、年齢構成をグラフにまとめました。

3会場ともに30代、40代が多く、更に子育て中の方が多く見受けられました。

続いて、実施方法について御説明いたします。

第2シリーズは、参加者によるグループワークを実施いたしました。実施内容といたしまして、合計特殊出生率2以上を実現するために、青森県では、どのような取組が必要か。また、優先順位が高い取組は何かを話し合い、最後に参加者全員で意見交換の結果を共有しました。

実施方法です。

次ページの取組について、以下の順に優先順位を検討しました。

- ① 個人ワーク1、自分自身に必要と考える取組について優先順位を検討する。
- ② 個人ワーク2、青森県に必要と考える取組について優先順位を検討する。
- ③ グループワーク、①、②について、3ないし5人のグループで意見交換し、取組の優先順位を検討しました。

順位づけしました項目は、御覧のとおりです。

こちらは、第1シリーズでされた意見をもとに、12項目に絞り、参加者に提示いたしました。

グループワークの結果についてですが、12項目の中で同一順位のものがあり、表のとおりまとめております。優先順位が高かった取組の順番。

- 1、女性の定着・女性の還流
- 2、子育て費用の軽減
- 3、職場の理解促進
- 4、育児負担の軽減
- 5、結婚支援・出会いの支援、結婚の良さを伝える取組
- 6、男性の育児休業促進、働き方改革
- 7、子育てに対する前向きなマインドの醸成
- 8、不妊治療の無償化

次にそれぞれについてグループで出た意見ですが、

- 1、女性の定着・還流

結婚、出産を考えると、女性でなく若者を定着させる取組が必要である。

若者が県内に残りたいと思える環境づくりを進めて欲しい。

県内人口の減少を抑える取組を最優先に実施して欲しい。

女性が結婚、出産しても仕事を辞めず、職場に定着できるようにして欲しい。

大手企業を誘致し、若者の雇用の場を確保して欲しい。

若者が就職したいと思うような職種を作り出して欲しい。

県内企業の魅力アップ、若者の定着を図って欲しい。

次に2、子育て経費の軽減

子育て費用を軽減する取組は、市町村で差があるため、ばらつきのない支援を実施して欲しい。

多子世帯への費用の支援は手厚いが、一子のみ世帯への支援が薄いので、支援を充実させて欲しい。

子育ては、お金がかかるという印象が強い。

大学費用が高く、更に一子を持つことを断念している。

次に3、職場の理解促進

職場に気を遣い、短時間勤務をしたり、育児休暇を取得することが困難である。

妊娠等の体調不良に対する職場、特に中小企業等の理解が不足している。

育児休業を取得している企業に対して、補助金があると職場も更に協力的になるのではないか。

育児休暇やこどもの急な体調不良の際に休暇を取りやすくして欲しい。

次に4、育児負担の軽減

母親のストレスや体の負担を軽減する取組が必要である。

シッターの利用が進むようにして欲しい。

育児負担を軽減する支援制度について、情報提供をして欲しい。

5、結婚支援

結婚や家族を持つことの良さを伝えて欲しい。

自然な出会いが少ないため、イベント等を開催した方が良い。

結婚に繋がった支援の好事例をメディア等で発信してはどうか。

6、男性の育児休業促進、働き方改革

男性の短時間勤務ができるよう、働きかけて欲しい。

男性が育児に参加するよう、男性の意識を変化させることが必要である。

仕事から早く帰れるようになり、夫婦の生活に時間的なゆとりが生まれると、出生率に大きな波及効果が期待できると思う。

育児休業取得者がいる時に企業が業務の代替者を確保できるように優先的支援をして欲しい。

次に7、子育てに対する前向きなマインドの醸成

男性の育児参画を進めるため、男性への教育が必要である。

子育ての大変さを周りが理解し、こどもに寛容な社会になって欲しい。

地域の皆で子育てする社会になって欲しい。

8、不妊治療の無償化

晩婚化の加速が不妊の原因であると考え、すぐに不妊治療費の支援を始めて欲しい。

不妊治療全てを無償化するのではなく、費用対効果を考えて、効果があると思われる人や治療方法に対して支援をして欲しい。

といった御意見がございました。

続きまして、御参加いただいた本人の御意見をまとめましたので報告いたします。

こどもがいても夜勤があるため、夜間に小学生低学年のこどもを預かってくれる制度が欲しい。

ライフプランセミナーを開催し、次の親世代に出産や子育てについて学んでもらうことが必要と感じる。

シッターや家事代行の費用を助成して欲しい。

幼児保育を充実させて欲しい。

シニア世代や学生ボランティアこどもが交流できる多世代交流の場が欲しい。

子育てについて、相談できる場所、関係機関等や子育て支援の情報発信を充実させて欲しい。

育児の孤独感を軽減する取組が必要である。

といった意見がございました。

第2シリーズ実施についての報告です。

一人ひとり、青森県に必要と考える少子化対策の取組の優先順位が異なる。

多くの分野にまたがる総合的な政策が必要である。

県民も少子化について関心がある。

以上を踏まえまして、こども・子育て「青森モデル」を県民に周知し、こども・子育てを応援する意識を共有しながら、少子化対策に取り組んでいくことが重要であると思います。

最後にワークショップ第2シリーズを含め、6会場を実施しまして、御参加いただいた皆様の活気ある状況がとても印象的でした。

受付時は緊張された面持ちの方も帰られる際に「参加して良かった」「話足りなかった」などのお声がけをいただいたこともとても嬉しく思いました。

この事業に携われたことに感謝申し上げます。

以上が第2シリーズの実施結果となります。

御清聴、ありがとうございました。

(司会)

続きまして、県から、令和6年度青森県子ども関連当初予算案について説明いたします。

(県)

(省略)

(司会)

続いて、青森モデルの方向性について、知事とメンバーとの意見交換を始めますので、よろしく願いいたします。

(宮下知事)

皆さん、長い説明を聞いていただきありがとうございました。

冒頭、私が話したのは、私も変われるので県民の皆様も凄く変わってもらえるというふう
に思っているということと、諦めずに皆さんから率直な意見を聴きたいし、皆様、諦めずに
同じことを何回も言っていただいても構わないし、これまでの間も皆さんのお友達や様々
議論してきていただいていると思いますので、それも伝えて欲しいということです。

「青森モデル」って、中身はこれからだと思うんですね。

結論から先に申し上げますと、各地でワークショップをやっていただいたこと、それから、
これまで、今日まで、何度も皆さんともやり取りをさせていただいていますので、皆さんか
らやり取りさせていただいていること、そして、今日、またここでやり取りをすること、そ
れに加えて、あと1回か2回ぐらい、できれば全国の有識者と言われるような取組をしてい
る人たちから御意見を伺う機会を設けて、それを聞いて、総合的な青森モデルというものを
作っていききたいと思っています。

これは、単なる子育ての政策とか無償化の政策に留まらずに、やっぱり教育の分野、ある
いはもっといろんなインフラというか、社会資本整備の分野とか、そういったところまで広
げていくような形のもの、経済政策も含めてですね、ということになってくると思いますの
で、そういう幅広い議論ができればいいかなと思っておりました。

ということで、今日も皆さんとの意見交換を進めさせていただきたいと思うんですが、ま
ずは、今の発表を聞いての感想とか御意見とか、それに加えて、今日、そもそも何か準備し
てきたものがあれば、皆さんからお伺いしたいと思います。

まずは、1周したいと思っていて、1周した後は、時間の許す限り、1周する中で私が気
になったこととかを皆で意見交換できればと思っていますので、まず1周します。一人3分
から5分ぐらいでまとめていただければと思います。

御協力、よろしく願いします。

(工藤さん)

私は、先ほどのこのワークショップのお話を聞きまして凄くまとまっていて凄いなと思いました。

それで、ここに集まってきた皆さん、やっぱりこのことに関心のある方たちって、自分たちでよく考えると出てくる答えは大体同じ答えが出てくるんだなっていう、会議で出てきた意見とワークショップで出てきた意見って、大分近いなと思いました。

ここまで様々な意見が出てきたということは、私たちがこのことに焦りを感じているんですけど、その焦りをどこか、そのことに関係のなかったと思っている年齢の方とか、男女も関係なく、結婚、未婚も関係なく、産む、産まないとかも関わらず、皆も自分のこととして捉えてもらえるように、非常によくまとまったこちらのワークショップのようなことをもっと広く知らしめることができれば、皆が自分ごとと捉えてくれるように、皆に広く広報できる方法があればいいんじゃないかなっていうふうに思いました。

それから、先ほど予算のところでは、これ、予算のところを上手く乗り越えていかなきゃ、マンパワーの不足をどうやって補っていくかというのを考える必要があるんじゃないかなっていうふうに感じました。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

牧野さん、お願いします。

(牧野さん)

前回、お休みしてすみませんでした。

今回、久しぶりに皆さんとお会いできてホッとしております。

最近、私の身の回りで結婚をしたり、妊娠したりする方がちょっと増えたように感じます。

たまたま、私が今、こういうメンバーとして発信していることも相まってか、若干、上司の認識も変わってきたように思いますし、職場にもそういう方がいて、嬉しく思っています。

先ほどのワークショップの報告の時にも、終わった後に凄く「こういうことを話したかった」という方がいると聞いたんですけど、きっと、皆、潜在的に子育てをしている方はそういう意見を持っていて、もっと幅広く、私たちだけでなく、いろんな言葉を受け取る機会があってもいいんじゃないかなというふうに思っています。

私自身が感じていることは、世間一般的にというか、ネットとかを見ると子育てに幾らかかるとか、そういうのはあるんですけど、実際、青森県で子育てをしていくにあたって、大体こういうところに幾らぐらいかかるとか。そういうところが細かく明示されていれば、自分がもしそういうふうになった時に、どんなところに困るのかとか、自分が今、どれだけ頑張ればいいのかというのが分かるかなと思います。

教育改革の方とかも、私、たまにネットで見るとは、実際にこどもが教育されているとか、学校に通っているこどもを持っている立場としては、学校教育費だけでなく、細かくいうとジャージとか靴とか、そういうところに物凄くお金がかかります。

先日、ちょっと勘違いでなければ、むつ市の方では、通学費の補助とか何かをやられていると思うんですけど。

(宮下知事)

半額を助成するようです。

(牧野さん)

私もこどもの高校の冬期の通学費だけで片道7万円と提示されたんですけど、うちはこどもが4人いるので、それは当然無理だとなりました。

結局、親がせつせと送り迎えをすることになり、生活が回らなくなるという事態に。そういう細かいところのサポートとか、無償で県内の、市内でもなんでもいいんですけど、スクールバス等に便乗させていくシステムを作るとか。そういうところでも、子育てのサポートをしてもらえたらいいなというふうに感じています。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

(種田さん)

こどもが2歳と3歳になって、ちょっと最近、こどもたち同士でも遊べるようになってきたので、ちょっと育児が楽になってきたかなというのがあって、やっぱりこどもが小さいうちは凄い大変だなと感じた種田です。

県のこども関連予算の271.8億円って、凄いですか。その数字の規模をみただけでは、ちょっといまいち分からないなと思ったのと、ニュースで取り上げられている小中学校の給食費の無償化について、給食費からスタートしようと思った理由を聞きたいです。

それから、ワークショップの報告書にシッターや家事代行の費用を助成して欲しいと書いてあるんですけど、私、ネットでシッターとかお願いしたいなと思って調べた時、(県内に)そもそも存在していなくて、そういうところをどういうふうに生み出すのかなというのを聞きたいです。

あと、費用対効果、不妊治療の件で書かれていたと思うんですけど、これって、やっぱり病院に行くしかないものですかね。ドラッグストアとかに行けば、排卵の検査薬とか、あと、おりものシートみたいなのでタイミングを計れるのがあるらしくて、そういうのに対しても助成とかってできるようになれば、病院に行く時間とかなくても、ちょっと積極的に取り

組めるかなと思ったので、それを聞きたいなと思いました。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

ちょっと、今、折角質問がきたので、お三方に、今、私の考えというか、助言させていただきませぬ。

まず、工藤さんからいただいた、皆が自分のこととして考えていくという視点が凄く大事で、普段、子育てばかりやっていると、何か皆が誤解をするんですよね。子育てのことばかり県政がやっているって。でも、決してそうではなくて、こどもたちが増えていかなければ、あるいはこどもたちを大切にできなければ、私たちの世代もその上の世代も、これからこの先、大変なことになると。やっぱり仕事の担い手がなくなって、担い手がなくなると経済が縮小して、経済が縮小すると、どんどん、どんどん貧乏になっていくと。そういう世の中がいいのか、逆にこどもが増えてきて、こどもたちが大人になって税金を納めて、上の世代のお爺ちゃんもお婆ちゃんも支えていって、また更にこどもが増えていくという、そういう世界がいいのかっていったら、絶対、こどもが増えていく方がいいでしょう、ということは今、やっているということなので、そういうことを言い続けている、やり続けているということは、しっかり発信していかなきゃいけないなと思います。

工藤さんと牧野さんが共通で言っていた話があって、広報というのをちゃんとやるべきだということと、幅広くそういうのを受け取る機会を設けるべきだというのは、私、ずっと考えていて、やっぱり子育てのプラットフォームって必要だと思うんです。しかも、それが、今までみたいな「ホームページに書いてます」だけじゃなくて、例えば、SNS、ラインでもインスタでもいいんだけど、例えば、お得なイベントがあるなら通知が来るとか、お得な、例えば、3万円給付をやりましたよね、昨年度、今年度か。3万円給付をやったら、そういうのも、いつからいつまで募集しています。この応募に来てください。いきなり通知がくると。それが、専用フォームに飛んでいく仕組みだと。

あるいは、さっきのシッターの話もありましたけど、そういう情報の一覧性があるような、やっぱりサイトというか、プラットフォームは凄く必要なんだと。その先にもちょっと考えていることがあるんですけど、今日、メディアが一杯いるので、とりあえずやめておきますけど。

本当にね、それは何とか始めていきたい。これは、来年度の予算ではちょっとなかったんですけど、10月までによく考えていきたいと思っています。

牧野さんから、もう1つ、幾らかかるか知りたいという話があって、意外と私は、それを出しちゃうと、皆、躊躇するから、何とかなるというメッセージだけで、何とかなるって、まさに子育ての費用がどんどん軽くなっていくんだという社会のメッセージを出し続けた方が、むしろいいのかなというふうに思っています。

もう1つは、これは、牧野さん種田さんから、共通の話題だったので、ひとつ申し上げるんですが、ジャージとか学用品とか通学費というのも、実は今回、無償化の対象になっているんですよ。この小中学校の給食費の無償化を最優先とした子育て費用無償化の取組ということであると、これは対象になっているということは、まず事実としてあります。

それに加えて、何で給食費からかというお話なんですけど、理由は、簡単に言うと2つあって、1つは影響の範囲が非常に大きいんです。やっぱり、小学校と中学校の児童生徒というのは、こどもに占める割合というのが一番大きいから、そうするとそこを無償化することで、ある意味、可処分所得っていう言い方はあれだけど、実質的な所得が伸びるような対策ができる。それが1つ。

もう1つは、本県は、やっぱり農林水産県なので、やっぱり良いものを沢山作っているわけですよ。良いものを沢山作っているもの、やっぱりこどもたちにしっかり食べさせてあげたいなという、そういう想いがあるので、その2点が主な理由です。

今、もう、実際、給食費やっている自治体が、市町村が17、残り23がやっていない自治体なんです。やっていない自治体はこれを使って、この交付金を使って、まず給食費を無償化します。

そうすると40市町村全部給食費は無償化されます。

実際やっているところは、給食費に充てちゃいけないということにしたので、新しいことを始めなきゃいけないんですよ。そうすると、新しいことを始める中で、例えば、学用品の話だとか、通学費の補助だとか、それこそ保育料の無償化だとか、もしかしたら、この議論を聞いている人は、車1台とかね。そういうのもあるの。分からないけど。

でも、そういうこともできるようにするのが、今回の仕掛けなんです。多分、日本で初めての取組になるので、これは、私も凄い期待しています。青森県って、凄いなって多分なると思うんです。10月になったら給食費が全部無償化になっていて、無償化しているところは、更に新しい取り組みをする。

今日は、南部町の田中さんが来ていませんが、南部町なんかは、修学旅行までお金を出さって言い始めたんですね。

だから、そういうことがどんどん、どんどん始まっていくので、そういう部分では、かなり進むと思うんです、私は。

それから、シッター等がないというのは、実はそうなんで、ここもちゃんとやっていかなくちゃいけない。

もう1つは、不妊治療の自己負担に対する支援って、これ、病院区分だけです。自己負担に対する支援って書いていますけど、簡単に言うとタダで受けられるようになります。無償化です。なので、これも、今、悩んでいる皆さんにとっては、非常にプラスになると。

これ、実は、2億500万円ってなっているんですけど、1回不妊治療を受けると数万の単位ですよ。数万の単位で物凄い負担があるんです。そこを軽減してあげようということ、ちょっとしたそういう検査薬だとか、何とかっていうのは、それも大変だという方はいるか

もしれないですけど、まずは大きいところから、県なので、やっぱり。市町村だと、そういうところも支援する可能性もあるんですが、県なんで、やっぱりそういう大きいところからやっていこうという意味で、全額県が出しますよという、そういう支援なので。私は、これから不妊治療をやろうとしてくれる人は喜んでくれるかなって。今、やっている人も含めて喜んでくれるかなというふうに思っています。

まずは、一旦、そこまでにしますので。

坂本さん、お願いします。

(坂本さん)

すみません、ちょっと長くなるかもしれませんが、なるべくまとめて言いたいと思います。

今回、青森モデルの方向性についてですが、余裕、ゆとりを持てる子育てを意識したものにしていければと思っています。

同じような意味の言葉の組み合わせですが、子育てやそれに関わる方、それを仕事とする方、ひいては県民全体が生活にちょっと余裕があるとか、ゆとりを持って子育てできているなど思えることが、結果的に合計特殊出生率の向上という目的に繋がると感じます。

国に対して、今、かなりの国民が不信感を持っている状況であり、収入は上がらない。

収入は上がらないのに税金は引かれるばかり、物価は上がるばかりという意識があります。

こうした閉塞感の中で、いきなり県として、県民の平均所得を上げるというのは、極めて難しいかもしれませんが、せめて手当などの拡充をして、県として、全国に発信できるモデルを目指していければと思います。

なおかつ、青森県の現状に合ったものを考えていければと思います。

子育てに関する悩み、保育士、学童の人手不足、ワンオペ、育児のストレスやこどもの貧困、子育ての孤独感、こどもを産めない、踏み出せない、結婚に踏み出せない、休暇を取りにくいなど、大体の悩みは、全て金銭的、精神的に余裕やゆとりがない状況で生まれていることが多いように感じています。

休みも取りにくかったりするのも、職場に人手不足で余裕がなかったりするためもあるので、まず、金銭的にも気持ちの面でも人員の面でも、サポートしていく必要があると思います。

ちょっとした頼れる場所や話を聴いてくれる人がいるだけでも救われることがあります。

また、税収を増やし、循環させていくためには、多くの若い人が残れる県にするため、働く場として、福利厚生のしっかりした大きな企業を誘致したり、県の魅力を発信し、教育にも取り入れ、残りたい、ここに居たいと思わせることも重要と感じます。

子育てを充実させ、他県からも暮らしやすいと思われれば流入が始まり、益々人口が増え、娯楽の場も増え、県外や都会に出る必要がなくなっていくと思います。

今はまだ、親も子、保育士、学童職員も余裕なく疲れ切っています。1日生活と仕事に追い立てられ、閉園ぎりぎりのお迎えで「遅くなってすみません」と、頭を下げる方もいらっしゃって、私は、職員なんですけども、見ているこちらが申し訳なく思います。

また、保育士をしている方の中にもこどもを持つお母さんが、私は、沢山いらっしゃるといことで、仕事上、他の子を見るために休みが取りづらく、自分のこどもと過ごす時間も少なく、葛藤している方もいらっしゃいます。

その他の職業でも、もっとゆっくりこどもと向き合いたい、一緒に過ごしたいと思いがら、仕事と生活で精一杯な親御さんもいます。

こどもも朝から夜遅くまで預けられて、寂しさや疲労を感じている子もいます。そうした親子にもゆったり過ごせる時間、働き方、休日を過ごせることも大事なのではと思っています。

また、政府は、育児・仕事・介護の両立支援法案を出しましたが、これは、やはり、まだ小学生に対しては手厚くないなと感じました。

残業免除が3歳になるまでから、小学校入学までに延長、病気の看護休暇も小3までになっていますが、小学校にあがってからも、感染症などの流行で、しょっちゅう休みが必要になります。コロナなどで出席停止期間もあります。病気、看護休暇が年5日では少なすぎるように感じます。小学校は、保育園とまた違った大変さがあり、1年生でも忙しく、とても疲れている子が多いです。

また、人手不足の職場や中小企業は、時差出勤などに対応できるのかといった問題。そもそもテレワークではできない仕事をしている方も多く、全ての企業では難しいのではないかと感じます。

そうしたことも県としても考え、補える方法を模索していけたらと思っています。

学童保育に関しても、保育園と学童保育に関しても、職員の配置基準見直しや賃金だけでなく、こどもの人数に対する部屋の広さについてもゆとりを持って過ごせるように考えていただきたいです。

また、学童に関しては、学校との連携が十分できているところもあれば、そうでないところもあったり、保育の質にばらつきがあったりもします。そこも改善できるよう、まず現場としての議論が深まる機運が高まればと、私は個人的に思っています。

とにかく手厚いサポート、県内で普通に働いて、税金で引かれても収入がしっかり残ること。福利厚生充実など、金銭的にも精神的にも余裕とゆとりがあれば、結婚したい、県に残りたい、ここに住みたい、もう一人産みたいと思う人は増えると思います。

ゆとりや余裕のなさが人を追い詰めたり、諦めや幸福感を失わせてしまうと思います。

なので、やはり一番は休みが取りやすく、働く場がある、選べる、保育士、学童保育職員の待遇改善、こどもの預け先の受け皿の充実、県独自の保育園の保育士配置基準設置、子育て手当、保障の充実、ゆとりある子育てができる青森県をイメージしたいです。

そうした青森モデルを作っていけるように、具体的に更に形にし、予算案の内容を実施し

てくれたらと思います。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございました。

(山内さん)

最近、給食にホタテ率が上がって、こどもたちは美味しいホタテを食べています。

牧野さんは、先ほど、嬉しい雰囲気、明るい雰囲気になっているって、子育てに関して言うんですけど、個人的に私の周りでいくと、お子さんの療育のためにお仕事を辞めることになったとか、育休から復帰する時に時短を選択したわ、とかっていう人が何人かいて、私的には、ちょっとまだまだかな、というところで過ごしていました。

3点ほどお話をさせてください。

その前に先ほど種田さんは、271億円って、どれくらいの規模なんだろうっていうのを私も思っていて、ちなみに令和5年度はどれくらいの額で来年度はこういう額なんだよ、みたいなものがあれば、よりこども、真ん中を意識している周知になるのかなと思って聞いていました。

まず1点目なんですけども、青森市は、今、給食無償化実施中です。そうなった場合、宮下知事が言うように青森市は新たな事業を組み立てることになりますよね。そうなった時に、来年度は、じゃ新たな事業を始めました。令和7年度になった時って、それは継続するのかなっていう想いです。

そうすると、青森市は、給食無償化は常に続くし、新たな事業も続くイメージ。

(宮下知事)

そういうことになります。

(山内さん)

分かりました、ありがとうございます。

2点目なんですけれども、予算案の3ページ目になります。すみません、職業柄、ちょっと意識がそちらに向いてしまうんですけれども。5億円かけているスクールサポートスタッフの配置です。

とてもありがたいです。印刷も枚数が増えているのでバカにならない。それにかかる時間って、バカにならないなとは思いますが、ペーパーレス化が進んでいます。そうなった時に、印刷ばかりスクールサポートスタッフさんに頼めない。

そして、一番やっぱり私たちが求めているのって、先生たちが休んだ時に誰が入るか。休み、そこに誰かが入ってくれるっていう安心感があると休みやすいにも繋がるのかなと思

います。

そうなった時に、スクールサポートスタッフさんでは、やはりその対応に当たられないというところでもどかしさを、私自身感じていました。

3点目です。

私もこの答えが出ていないんですけども、じゃ、お母さんも休みが取りやすい。お父さんも育休や育児に参加する機会を増やそうという意識は、今、高まっていますけど、じゃ、それは、誰が穴を埋めるんだってなった時に人手が足りないって言っている中で、更に子育てが終わった人とか、独身の方がそれを補填するという循環になっているのではないかなと、話を聞いて思いました。

そうなった時に、後で坂本さんにも聞きたいなと思ったんですけど、放課後児童クラブの職員とかは、学生アルバイトとか、教職とか保育に興味にある学生さんを雇うとか、そういうところで人員を確保していくというのは、どうなのかなと思っていました。

弘前とかだと弘大があって、そういうのは充実しているのかなと若干思うのですが、青森ではあまり感じていません。

また、坂本さんの的には、いやいやちゃんとした人が来て欲しいと思っている部分があるのかもしれないんですけども、そういうのを考えました。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

2人から沢山出ちゃったので、ここでまたお答えします。

2周目する時にまたお聞きいただければと思いますが。

まず、保育士、学童保育、あとは配置基準、結果的に余裕とゆとりのある子育てをしなきゃいけないというのはそのとおりで。

これは、青森モデルっていうのは、どういうふうに打ち出すかはさておき、必ず項目として入ってくるのだと思いますし、何が大事かと言うと、何をやるか。問題は皆分かっている、現場の人たちから私もよくお話を聴いているのでよく分かっていると。

ただ、その時に具体的にお金で解決できる問題なのか、人がいなきゃいけないのか、システムなのかっていうことが大事なので、やっぱりこうしたら良くなるっていうことを言っていたきたい。

だから、それは、例えば、配置基準を見直して、配置が沢山、こども3人に対して1人にしてくださいというふうな話だとしても、それは、人が足りなくなっちゃうと思う。だとしたら、解決方法にそれはなっていないということになっちゃうから、現場の意見ということで行くと、やっぱり具体的にどうすればどうなのかということまで、やっぱり踏み込んで考えていくことが必要だろうと思います。

それから、ごめんなさい、さっき種田さんからの御質問、271億円というのが、どれぐら

い凄いのかということと、令和5年と比べてどうかという話なんです。いや、これはとてつもなく凄いと思います、この予算というのは。

令和5年との比較というのは、これまでこういうまとめ方をしていないから、できないと思う。

逆に言うと、丸々プラスになっている。例えば、こども・子育て青森モデルの推進21億円だとか、教育改革の推進だとか、それだけでも51億プラスになっているわけですよ。皆増ですね、全くの増、100%の増なので。この51億って、どれぐらい大きい数字かということ、普通の町とか村の1年間の予算ぐらいあります。だから、これは大きいと私は思いますし。

その他も新規でやる事業というのは、0・1の世界観ですので、例えば、不妊治療の4億円もそうですし、それからスクールサポートスタッフも5億円というのは大きくプラスだと思いますし、小中学校の働き方改革の2.58億円もそうですよ。あとは、小中学校も1人、1学級33人か、これは前からやっている部分ですが、これで完成されるので10億800万ということになりますから、相当、100億近くプラスにはなっているんじゃないかと、私は、そう思っています。

それからですね、スクールサポートスタッフの話でいくと、今回は、全小中学校に配置ができるということをまずは重視して、1校、1人いる形を作るための予算という形にしました。

これも、これは、これでいいのかどうか。これで足りているか足りてないかっていうと、これでも足りてないと思う。逆に、1校3人にする、1校5人するってやっていると、それで足りるかということ、多分、また足りないってなる。

だから、本質的に、多分、そういう問題じゃないと私は思っていて、どっちかということ、学校のマネジメントっていうのは、多分、凄い大事で、ただ単に人を増やせば、先生方の負担が軽減されると、私は全く思っていないで、どっちかということ、それぞれの学校が抱えている様々な非効率な昭和99年のやり方をいか令和5年のやり方にアップデートできるかということに尽きるんだと。

だから、形として、33人学級で先生の数も実質的には増えます。相対的には減りますけど。実質的に先生の数も増える。スクールサポートも各校1人ずつ増えるけれども、人を増やただけで、学校の働き方改革が進むと、私は思わないので、校務支援システムの導入とか、あとは学校運営のコンサルティング支援とか、そういうこともやりますので、そういうところとセットで人はあまり増えない中でも人が増えたようなゆとりのある働き方ができるようなことを小中学校も含めてやっていきたいというふうに思っています。

最後は、放課後スタッフのお話も出ましたが、放課後スタッフというのは、学童にしても何にしても、当然、学生のボランティアとか、いろんな地域の人たちってあり得ますから、そういうところを上手く、私は活用して欲しいと思います。

まずは、そこまでにしましょうか。

そうしたら、和田さん、お願いします。

(和田さん)

ありがとうございます。

まず、今日、参加して「こどもまんなか青森」っていうのが出てきたと思うんですが、「こどもまんなか」っていうのが、凄くいいなって、まず1つ思いました。やっぱりこどもを中心にこれからやっていくぞという気持ちが伝わってくるなって。

この会議自体もそうなんです、この会議とかこういう「こどもまんなか青森」とかってやっていること自体、青森では、こどものためにやっていくぞという県民の意識の醸成の効果があるんじゃないかなって言うふうに思っています。

知事が前に出て「こどものためにやっていくぞ」って、こうやってくださっていること自体ありがたいし、意識を変えていくんじゃないかなって思っているので、凄く良いことだなと思っています。

今日の資料の中で気になったところとして、まず最初のワークショップの実施報告について見て気になったのが、20代とか10代後半のアンケート結果が少ないんじゃないかなと思いました。

やっぱり、こどもを増やすというところでいくと、10代とか20代の意見というのは、凄く大事なんじゃないかなと思います。これ、勿論、参加したい人が参加しているので、どうしても子育てしている方が多いと思うんですが、実際に出産適齢期にあたる10代、20代の意見を聴いていくことも大事なんじゃないかなって言うのがまず1つ。

あと、予算の方でいくと、私は高校で働いている関係もあって、この教育改革の中には、高校は入っていないのかなと、よく高校の職員でも話題になっているところです。高校は部活動がなかなか別物にできない現状が、いろいろ理由があると思うのですが、土日とか放課後というところでいくと、非常に厳しいなと思うところがあります。実際、私は、こどもを増やすというところでいくと、やっぱり働き方改革が大事なんじゃないかなと思っています。余裕とかゆとりということを坂本さんが言ってくださっていたんですが、私もこどもを産みたくないって、この会議のメンバーに応募した際に応募用紙に書いたんですが、今、3年生の担任を終えて、よし、やっぱりこどもを作ろうかなと思って、今、実際に病院に通ってみようと、旦那と一緒に思っているところでした。実際通っています。

けど、病院に行く時間を取るのが厳しいというところがあります。だからといって、職場に、それこそ、こどももない状態でできるか分からないのに、休みをくださいと言って休むということは、正直、できない。できないというか、言うものでもないところもあって。

なので、お金の助成というだけじゃなくて、やっぱり働きやすさとか、休みやすさっていうところがポイントになってくるのかなと思います。

それから、働き方改革でいくと、このアンケートの中に「仕事から早く帰れるようになり、夫婦の生活に時間的なゆとりが生まれると、大きな波及効果が期待できると思う」とあるん

ですが、子をもちたいと思った時に、夜の8時とか9時に帰ってきて、食事を作って、洗い物をして、洗濯をして、次の日、仕事があるから、となるとそういう気持ちにならないです。

だから、やっぱり仕事を減らさないと、根本的に。こどもを作る意思があっても、早く帰れるようにして時間的なゆとりを作らないと厳しいのかなって思います。

正直、多分、そういうリアルもあると思います。

お子さんがいる方だと、なおさら、こどもを更に作るぞとは、多分、なりにくいんじゃないかなというのは思っています。

私からは以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

最後、小山さん。

(小山さん)

小山です。よろしくお願いします。

まず、こどもまんなか社会の気運の醸成という、予算の方を拝見しまして、気運の醸成というのが、あおりモデルの中に入っておりますけれども、これ、結構、私も子育てしていて、肩身の狭い思いをすることが凄く多いので、こうした、例えば、駐車場って書いてありますけれども、目に見える形で子育てを応援して、サポートしてくれる空気づくりがあると、凄くありがたいと思うので、是非、この「こどもまんなか青森」をいろんな目に付くところに置いて欲しいなと。

「子育て世帯優先駐車スペース」と記載されていて、私は、上の子が今、4歳なんですけど、車を停めるとすぐに走り出しちゃうんです。危ないんですよ。結構、他県でも最近死亡事故がありましたけども。やっぱりこれは、こどもの命を守る意味でも、是非、多くの施設で導入して欲しいなと思います。

それから、保育士の待遇改善というのもありましたが、これは、同時に保育の質も向上されるように努めて欲しいと思います。教育改革の方にデジタルとかICTとかありますけれども、こういったデジタルとか、あるいは既製品を導入することによって、保育士の負担も減ることもあるんじゃないかなとっていて、例えば、こどものお遊戯会に行ったりすると、衣装とか出し物とか、全部、先生の手作りだったり。

(牧野さん)

そうですね。

徹夜ですね。

(小山さん)

大変ですよ。園で付けるものも紙で切ったりされてっていうのを

(坂本さん)

私、保育士だった時もあるので、徹夜ですね。

(小山さん)

これ、大変な作業だと思うんですけど。今、100円ショップに行けば、いろいろな材料も、簡単に作れるものが手に入ったりするというのがあったりして、でも、昔からそういった御努力があって、今があると思うんですが。少し効率的にできる方法もあるんじゃないか。ただ、これは、一素人の考えなので、是非、保育士さんからも、これは意見を吸い取って、何か効率的にできる方法。同時に、その時間を別なことにかけられる方法がないかということを考えていただきたいなと思います。

ひいては、保育士が凄く青森では働きやすくて、人気の職になるといいのかなと思います。

それから、ワークショップの方も拝見しまして、この中から、今後、私個人としてやって欲しいことなんですけど、まず、女性の還流定着というのがあって、結婚・出産しても職場に定着できるようにという意見がありました。

これを私の友人や同僚で話を、同僚から話を聞いても、こどもは欲しいんだけど、この先の仕事のプランが立てられないとか、職場に迷惑をかけたり、自分のポジションを失うんじゃないかっていう想いがあるって、やっぱりこどもはいつか欲しいけど、具体的には考えられないっていう声をよく聴くことが多いんですね。

なので、妊娠・出産しても、あなたの席はちゃんとありますよ。ちゃんと大事なポストを守りますよ。その先もちゃんと保障しますよということを青森ではちゃんとやりますということ、まず、青森の職員の方から広めていただくと嬉しいかなと。

もう1つで、その他の意見の部分に夜間に小学生のこども、低学年のこどもを預かってくれる制度が欲しいと。うちは、まだ幼児ですけども、これ、結構、切実で、私自身出張があって、例えば、夜まで八戸にいたりすることもあるんですけど、仕事が夜までかかることもあって、その度にどうしようと思って、夫に仕事を調整してもらったりとか、両親に相談したりとかしているんですけど。もうどうしようもない時は、仕事を諦めるしかないのかなって、折角、アポ取れたのにもう諦めるしかないのかなって思う時は、結構、絶望した気持ちを何度も味わっています。

私自身、仕事柄、いろいろな人の話を聞く中で、子育てショートステイという事業があって、最大7日間、乳児院とか児童養護施設など、保育士とか栄養士のプロのいる安心な施設に預けられる事業があるんですけど。秋田や岩手では、半数以上の自治体でやっているんですけど、青森では、4分の1の市町村しかやっていないという実態がありまして、青森市ではやっていないんですよ。こどもを預けられるこども・子育てショートステイ事業が、私もあったらやっぱり使いたいし、あるっていうだけで、最後の砦になって安心できるので、こ

うしたものを全市町村といたしますか、青森の中でなるべくまんべんなく使えるようにして欲しいなと思います。

(宮下知事)

ありがとうございました。

今、お二人にお話をさせていただきました。

和田さんのところで、最初、20代とか10代の意見がなかったというのが残念だったということなんですけど。私も本当に実はそう思っていて、残念だったかどうかじゃなくて、実は、合計特殊出生率とか、こども・子育てということを考えた時にこどものいる家庭ばかり応援を考えるんですよ。だから、こどもをもう1人産むためにはどうしたらいいか。2人目を産むためにはどうしたらいいか。3人目を産むためにはどうしたらいいかって考えがちなんですけど。

実は、今の根本の問題って、結婚しない人が多くなっているということ。結婚しない人が多くなっているということが根底の問題にあるから、実は、10代とか20代の女性の意見をちゃんと聴かないと、多分、上手くいかないんですよ。子育て世代ばかりに聴いても。だから、それは私も凄く意識していて。そこはちゃんとやりましょう、これからは。

もう1つは、高校の予算というのは、実は県立高校なので、例えば、4のデジタル教材の活用とか、ICTサポーターの配置とか、自動採点システムとかと書いていて、当たり前のように県立高校は県が面倒をみるというか、面倒みるっていえばあれですけど。やることなので、あまりこう、大々的に書いてないんですけども、例えば、自動採点システムなんていうのも、本当にこれ、先生方に逆に聞きたいんですけど、マル付けする必要、ありますか、今。

(和田さん)

マークシートにしています。

(宮下知事)

でしょう。

(和田さん)

でも、結局、やっている先生が多いです。

やっぱり思考判断とか見たいとなると、結局、書かせないと思っちゃう。

(宮下知事)

私が思うのは、思考判断をさせるのに記述というのも、結構、昭和99年の考え方で、今年、令和5年でしょう。2024年でしょう。学校は、昭和99年から抜け出していない

い。

何でかってというと、最も記述で論理力を見る司法試験は、多分、再来年ぐらいには、もうコンピュータテストになるんですよ。

だから、論理的な思考を見るということも、別にマークシートだってできるじゃないですか。選択肢を難しくすればいいだけなんだから。

数学だって、立式するのも、例えば、難しい問題って、ずっと式があって、アからホぐらいまで、全部埋めさせればいいだけじゃない。それをマークシートにすればいいだけ。

そうすると、採点の時間も順位をつける時間も必要ないでしょう。それで画期的になる。小学校はちょっと違うかもしれませんが。中学校ぐらいからは、もうそれをやればいい。

(和田さん)

知事、是非、学校に来てください。

(宮下知事)

いつも言っているんだけどね。校長先生が聞いてくれれば。

でも、だから、そういう予算も実はあって、中間と期末の時に大変でしょう、何百人もやらなきゃいけない。

だけど、ああいうのって本当に時代とそぐわないなど。パソコンを通せば、順位をつけるのも点数つけるのも、何分かでするものを先生たちが何時間もかけてやるでしょう。それに価値があると思っている人たちがいるけど、それは違うと。それは、考えていかなきゃいけないし、教育改革の方向性の大きな1つだと思います。

もう1つ大事なポイントが、さっきちょっとプライベートなことまで凄く言ってくれたこと、凄く嬉しくて。それ、凄い、私も問題意識を持っています。

結局、仕組みを作っても、これ、大事なんですよ。大体、こういう人は、予算つけたって自慢するんだよ。270何億だとか、50億プラスになって、財布に入らないだろうとかって自慢するんだ。それが、生きた金になっているか、死んだ金になるかって、全く別な話。

種田さん、言った方がいいよ、この270億、あと自分のところに幾らくるんだって言った方がいい。実際そうなんだよ。

だから、そのチェックをしないと、ただ単に行政側が、県庁が、知事が予算つけたって自慢していても世の中は良くなるじゃない。

だから、例えば、不妊治療が無料になりますが、病院に行きたい人が行けなかったら、何の意味もないじゃない。逆に行けるようにするためには、どうしたらいいかみたいな話をやっぱり考えないといけないんですよ、次に。

だから、必ずそういう環境を作るということも青森モデルの中に入れましょう。

また、これも同じなのよ。モデル作った、入れましょうとって、入れたって言って皆、自慢するのよ。それができているかどうかまで、ちゃんとやらないとダメなんですよ、本当

に。これは、本当、政策としてそう。

あと、小山さんの肩身の狭い思い、これは、ずっと言っていたいでいることで、やっぱり「こどもまんなか」っていう文脈の中で、あらゆる業界の人たちが変わっていくということを、やっぱり作っていききたいですね、変革を作っていききたいですね。保育所の話は、お二人から出ましたけど、これもしっかり入れていきましょう。

ただ、大事なものは、質も向上も大事だし、どうするかみたいな、問題意識が生まれてくる。

もう1つ、最後に女性の還流ということ、働く場を守るということもずっと言っていたので、これも必ず入れましょう。入れた上でどうやって、やっぱりやっていくかということ。

私は、でもね、財源も含めて、凄いいいアイデアを思いついちゃったんだよな、この前。だけど、まだいいや、テレビカメラに囲まれちゃうから、もうちょっとお持ちください。もうちょっと時間をください。

だって、ずっと考えてこの1番の給食費のことも踏み出した。だから、給食費だけにして、例えば、財源もオッケーにしちゃうと、誰も、どこの自治体も車もオッケーにならないし、学用品もオッケーにならないけど、この仕組みだったら、もしかしたらそういうことがあり得るかもしれないじゃない。

だから、それは、ここでの議論は本当に生きているわけだし、だから、皆さん、本当、本音の話をまた、残り時間わずかですが、していただきたい。

あと、夜間の預け先、これは新しい論点です。よく理解しました。

本当にありがとうございます。しっかりやっていきましょう。

ということで、皆さん、一周しましたが、今までのお話を踏まえて、何かあれば、どうぞ。

(坂本さん)

先ほど、山内さんからお話がありましたが、現状の学童保育の人員確保の仕方、補充はやはり大学生アルバイトの夏休みや退職後の65歳以上の方を短時間で来ていただくというやり方が主です。それでも足りない、人が来ない。

こういった方たちを補助として来ていただくのは凄く助かるんですけど、何かあった際の責任の所在をどうするかという問題がまた生まれてきます。そうすると、やはり難しくなってくる部分もあり、ただやっぱりアルバイトで補助的な方を入れればいいのかという問題ではなくてくると思うので、ちょっとそこは、私たちも現状、悩んでいるところです。

配置が増えるということを目指せば、人が今度足りなくなるということですが、具体的にどうしていくか、それも私たちも凄く悩んでいます。

現状として、最初はそうしたアルバイトとか、高齢の方で足していくしかない。あとは、待遇を良くしていただいて、少しずつ人数を増やしつつ、質を高めていくしかないという感じですね。

でも、これは、こうした取組は、今すぐ結果を出すものではなくて、未来のために今から

少しずつ手掛けていって欲しいなと思っております。

(宮下知事)

ありがとうございます。

皆さん、拍手をお願いします。

やっぱり、本当に結果を出したいじゃないですか。折角、こうやって何回も議論しているので。だから、やっぱり何か画期的な方法を皆で考えて思いつきましょう。つきましようとか、何かあると思うんですよ。

もう1つは、「士」って付く人、一杯いるじゃないですか。看護師もいるし、歯科衛生士もいるし、保育士もいるし、介護士もいるし、社会福祉士もいるしとか。士業というのは、一杯、世の中にあって、基本的に士業も含めて、青森県って、全体が人手不足だから、結局、そこだけ処遇を上げて済む問題かっていう感じがあるのね。

先生たちだってそうでしょう。先生たちだって、もう小学校なんかはほぼ採用倍率が1.1倍とか1.2倍ぐらいになっちゃっているんですよ。

だから、そういうところは、もうちょっと何か、もう1アイデア、2アイデアが必要かなと、私は思うんですよ。やっぱり保育士を増やすとか、質を向上させるということ。よく考えていきましょう。私も常に考えていますので、よろしくをお願いします。

他、ありますか。

はい、どうぞ。

(牧野さん)

今の保育士の問題なんですけど、私自身、保育士、幼稚園に勤めていて、園が、結構大きい園なので、人数は結構いるんです。ただ、少子化に伴って、園児もこの後、どんどん減少していこうと。ただ、ちょっと配慮が必要な子とかが増加しているかどうかは分からないんですけど、現実、いるのは確かです。そこで先生たちも確保したいとなった時に、青森市ではですけど、小規模保育施設とかが凄く増えていて、先ほど、皆さん、シッターさんがいなかったって、私は小さい時、こどもをシッターさんに預けたことがあったんですが。そういう、多分、潜在的に資格を持っている方たちが、そういう園に来てくださることが望ましいなとは思っています。

分散している小規模保育でも、こどもたちを募集しているし、私たちも園児を募集しているので、合体させるのは難しいかもしれないんですけど、横の繋がりがあれば、ちょっと連携はできるんじゃないかなという気はします。

そうすると、先生たちの数も増えるし、こどもたちの数も増えて、正直、園児募集にも結構、頑張っているような状況なんです。

こどもたちはいるにはいて、それぞれのところに分散しているだけであって、なので、もう少しまとまって、先生がいれば、こどもたちも預けやすい環境にもなっていくだろうしと

いうふうには感じています。

それは、子育ての情報発信もそうで、県でやっているもの、市でやっているもの、民間でやっているものというのはそれぞれあると思うんですけど、調べると、それぞれやっているので関連性がないですね。これを合体させていただければいいなど。

それは、障がい児も同じで、市でやっている障がい児の相談のところと、県でやっているところが全く別物なので、じゃ、どっちに相談すればいいのっていうのが親は分からないわけですね。そういうところの連携がもう少しあればいいのになと思います。

あともう1つ、全然関係の話なんですけど。私、先日、娘の高校の参観日に行ってきたんです。その時に青森県の課題を取り上げた発表みたいなものやっております、保護者の皆様も是非、プレゼンの評価をくださいということで、いろいろ伺ってきて、たまたま子育て支援とかをやっていたので、そういうグループに行きました。高校生でも、青森県の課題を凄く的確に把握しています。

(宮下知事)

遠慮、ないからね、高校生は。

(牧野さん)

凄いなと思ったんです。

「こどもを産みたいと思いますか、皆さん」と言ったら、そこにいた女子高生は、皆「はい、勿論です」って手を挙げていて、希望は凄くあるように感じました。

ほかに、青森からの流出についての課題をあげているグループもあって、そこにいる子どもたちに、実際、自分たちは、じゃ青森に留まりますかって聞いたら、「いえ、県外に出ます」っていう話をしている、そういう子たちからの、高校生だとやっぱり大学進学に向けてちゃんと考えていると思うので、そういう意見をさっきのワークショップのところとかにも反映させていただければいいのかなというふうに思っております。

以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

やっぱり、県とか市とかの情報の窓口が違うという、これもやっぱり昭和99年、それは何故そうかという、やっぱり窓口があった時代、行かないやいけなかった時代、役場に、何事も。そんなこと、あるわけじゃない。役場なんていうのは、ほぼバーチャルで済むわけでしょう。コンビニに行けば、大体、いろんな手続きができるようになっているし、できない自治体もあるかもしれないですけど、できるようになっているし、全てがオンラインで、しかも今、データは、各自治体がサーバーというものを持っていた時代からクラウドになっている。つい最近まであれですよ、市役所、県庁になるのか、県庁はさすがにないと思

いますけど、このぐらい大きな部屋、もうちょっと、このひと回りぐらい大きい部屋にサーバーがあって、それ、全情報をそこに入れて、毎日、そこに入れ替えして更新していた、手で。ばからしいでしょう。それ、全部やめたんですけどね。

でも、それぐらい仮想化、デジタル化、クラウド化しているっていうことになっているから、それは、本当にチャレンジしたいですよ。そのぐらい、今、良いアイデアがあって。

ただ、やるだけだと絶対入らないじゃない、皆。だって、私のYouTubeチャンネルもまだそんなにまだ伸びていない。多分、皆、登録しているの？

ただやるだけで、面白くやるだけじゃ伸びないけど、本当に大事をそこで発信していますとなると、皆、登録するし、困ったことがそこで解決できるようになると、絶対登録するようになる。何かそういう仕組みを作れないかなと。

本当、そういう情報のプラットフォームは、是非、私はやりたいなと思っているんですよ。すみません、私の方が話長くなって。

皆さん、他いいですか。

はい、どうぞ。

(種田さん)

ちなみになんですけど、さきほど、こどもを作るための時間がないとかっていう話をしていたんですけど、青森県で、ブラックフライデーみたいなものをつくるというのはどうでしょうか。その日は、皆早く帰れる条例みたいなものを作れないのかなと思ったのと、よく、王林さんが知事になりたいって言っていて、今、宮下知事が「こどもまんなか」って言ってくれていますけど、もし王林さんになっちゃったら、これ、無くなっちゃうのかなと思って。

(宮下知事)

条例作るということまでは言えないんですけど、外国にはそういう法律があったりする国がある。休みを取れる、夫婦が休みを取れる。私はこれを調べたことがある。それはあるんです。それは聞いたことがあります。ちょっと今、スマホがあったら、自分で検索して、帰るまでに皆さんにお示しします。

知事が代わったらどうなるかっていうことは、私はあまり考えていなくて、どっちかという、普遍性があるテーマだと思うのね。普遍性というのは、ずっと続けていかなきゃいけないテーマだと思っているから、ここでちゃんと始めれば、そう簡単に私に何かあっても変わらない仕組みにはしていきたいと思います。

例えば、今、ちょっと前までむつ市の市長でしたけど、市長が今、代わったからっていつ、何かむつ市が大きく変わったということも多分ないし、それは、何故かという、ずっと丁寧に何十年先までも、太いところ、財政にしても子育てにしても、産業にしても、ルールを敷いて退いているから、そこが、私が代わったからといって、そこ簡単にはすぐ変わるということではないようにはしていきたいと思いますが、変わらないように努力しますの

で、よろしく申し上げます。

ありがとうございます。

(工藤さん)

働き方の点なんですけど、知事さんが喋られたような「士」が付く職業の方たちって、本当は介護士は介護だけしたいし、保育士は保育だけしたいしって、仕事を好きで、それやりたいのに、そのための書類とか手続きとか書き物とか、それが凄く多くて、そっちが仕事の時間になっています。

私も苦手だけどこれをやるしかないかなと思っているのは、ICT化かなと。苦手だけど、そういうものを導入して書き物をなるべく少なくなるように、そういうふうなことをしていかなきゃいけないなというふうに思っていて、そこ、ハードルが凄い高い私たちのために、そこをサポートしてくれるような、そういう、パソコンだとか、そういうものが得意な人たちを各事業所だとか、学校さんだとかに丁寧に、こんなバカなことを聞いても大丈夫だよっていうことを教えてくれる方を、その方ができるようになるまでサポートしてくれるようなシステムがあれば、保育士さんの書き物の、この雛形から選んでいけば文章になるよとか。介護士さんの今日のやったことを書くには、これから選んでいけば全部できるよっていうふうな書き物の時間を凄く短くできるようなことをするためのICT化が、パソコンが苦手な私もできるようになれば、マンパワーを補充、補うことができるんじゃないかと思います。

(宮下知事)

ありがとうございます。

それも来年度からも一生懸命やろうと思っていることの1つで、DXという言い方をよくします。デジタル・トランスフォーメーションか。これは、単なるデジタル化と違うのは、単なるデジタル化って、実はあまり生活を豊かにしなかったという反省があるんですよね。一生懸命、紙で書いていたものを一生懸命パソコンで打つだけだったんです。だから、結局、やっている時間変わらないみたいな世界観。

DXというのは、1個乗り越えていて、紙から簡単に入力できる仕組みにしよう。だから、紙でやるなら、例えばですけど、紙でやるなら1時間かかるのが、パソコンでやったら10秒で終わるみたいなことがDXなんです。そのDXという総合窓口を今、県庁に設置しましたので、これは、全産業、使えるようにします。全事業所が使えるようにしていますので、病院も御相談いただければ、寄り添って生産性向上に向けてやらせていただきますので、申し込み、御相談、無料になっておりますので、是非、御相談していただければと思います。

そのとおりなんですよ。結局、何していいか分からないというのがあるので、そこはちゃんと寄り添っていけるようにしたいと思っております。

以上です。

皆さん、他にありますか。

はい、どうぞ。

(山内さん)

知事は、先ほど、こどものいる人の支援の前に若者とか、まずこどもがいない人、ゼロが1になるような支援を考えていかなきゃいけないという話題に関連するんですけども。

私、高校生世代が身の回りにいないので、ちょっと感覚がずれているのかもしれないのですが、例えば、二十歳になったら婦人科に、気になっていることがあったら無料で行けるよみたいな、婦人科券、何て言うんですかね。

(宮下知事)

相談券。

(山内さん)

例えば、その相談内容は何でもよくて、生理痛が重いかってなったら、そこからちょっと小さい、その時から治療すれば治せるものとか、こどもが欲しいってなってから治療を始めるんじゃなくて、まず、自分の体を知る機会を設けていけば、こどもが少し身近になるのかなと思っていました。

(宮下知事)

拍手をお願いします。

それって、凄く私にとっては新鮮な視点だったんですけど、それはすぐにできます。別にその婦人科に行かなくてもいいわけでしょう。つまり、相談するプラットフォームを作ればいいだけだから、オンラインでちょっと相談してみるとかと、スマホで、だから、さっきみたいなプラットフォームがあれば、女性の悩みみたいな感じで、秘匿性の高い形で相談を受けて、その相談の積み上げがFAQになって、よく受ける相談みたいなものになって、県に積み上がっていけば、相談しなくても分かるっていうことでしょう。それって、AIのチャットボット使えばすぐできる。こういう相談、AIのチャットボットって、質問するとすぐ答えが出てくるから、そういうのがすぐできる。でも、ニーズがあるかどうかはさておき、それは凄くすぐできることだと私は思います。

ありがとうございます。

よろしいでしょうか。時間もそろそろですから。

最後に私から一言。

今日も皆さんからいろいろ御意見伺いました。全部、丁寧に拾っていますので、議事録ちゃんと全部起こしていますので、それを最終的にマッピングしてね、大谷翔平のマンドラチャート、みたいな、やっぱりゴールがどの辺にあって、今、何していくべきかみたいなもの

を作りたいし、やっぱり、今まで、折角こうやって積み重ねてきたので、行政の計画と違って、何か冊子になって、あまり誰も読まないじゃないですか。冊子になった瞬間に。

だから、そういうのじゃない形を何か作りたいなと思っていますので、今日もいろいろ、やっぱり、情報のプラットフォームって大事だなって、若干、皆と話して思ったし、そういうのも少しアイデアを出しながら進めていきたいと思っていますので、何をやる、やらない、優先順位とかっていうのは、普段の行政の仕事。ここは、もう、基本的には全部やりたいと。そのためにどうしたらいいかっていうことを考えるということで、引き続き、10月ぐらいに、実際、まとめたいと思っているので、あと、2回ぐらいは、全国でいろんなことをやってきた人たちの話を聴きながら、また皆さんと意見交換をさせていただいて、まとめていくということで考えていきたいと思っていますので、引き続き、どうぞ皆さんよろしく願いいたします。

今日もありがとうございました。

(司会)

皆様、ありがとうございました。

来年度の会議の日程につきましては、決定次第、メンバーの皆様へ御案内差し上げます。

メンバーの皆様には、引き続き御協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、令和5年度第3回青森県こども未来県民会議を閉会いたします。

本日は、お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございました。